

火事

永代美知代

襖一重置いた裏隣りの魚屋さんでは、お内儀さんも
 無い、やもめ暮しの癖に、何時も早仕舞ひの、若い親
 子二人差向ひで、酒も飲まず、ズーズーと、さも甘
 さうな音をさせながら、お汁らしいので御飯が始まつ
 た。

表では人の好い醤油屋さんが晩方の忙し時を、氣
 を利かした積りて、水をくんだり、胡麻を煎つたり頻
 りと勝手元を手傳つて居ると、
 『お前又何するだか、子供じゃあんめえに！ホラ、こ
 んなに眞黒にこがしちやつて、本當におゑねえもんだ

よ、コレ彼方い早く退いて見たい退いて見たいと云ふ
にお前聞えねえかよ。

とか何とか引切り無く、随分とがつた聞きづらい調
子で、お内儀さんから叱られ、それに一言云ひ返
へすでも無く。

「奥さんの手前があるてねえか、考へて見たい。」とこ
ればかりを繰り返し、こぜわし無げに、ごろ／＼お味
噌を摺つて居る。

其奥さんと呼ばれた此家の客人は中の間の机の前に
しよんぼり坐つて、鬱金木綿の二つ身を、薄暗らい三
部心の洋燈に、覺束無げに幾度と無く、透しては縫ひ
透しては縫ひ、裏と表と隣りの、物音を、聞けても
無く聞かぬでも無く、若い身空に、殊には普通ならぬ
躰で、斯うした漁村に居る事が、云ひ知らず住しいや
うな、はかないやうな氣もして、心では頻りに東京の
空を戀しく、良人の上を思ひ、遠い／＼故郷の両親を
可憐しんでこしかた行く末、然うして事をあれこれ思
ひ耽つて居る。

やがて襖がスーと開いて、奥さんが振返へると、お
内儀さんがお膳を運んで這入つて來た。

「どうも遅くなりまして、サ濇いうちに何卒、柔い

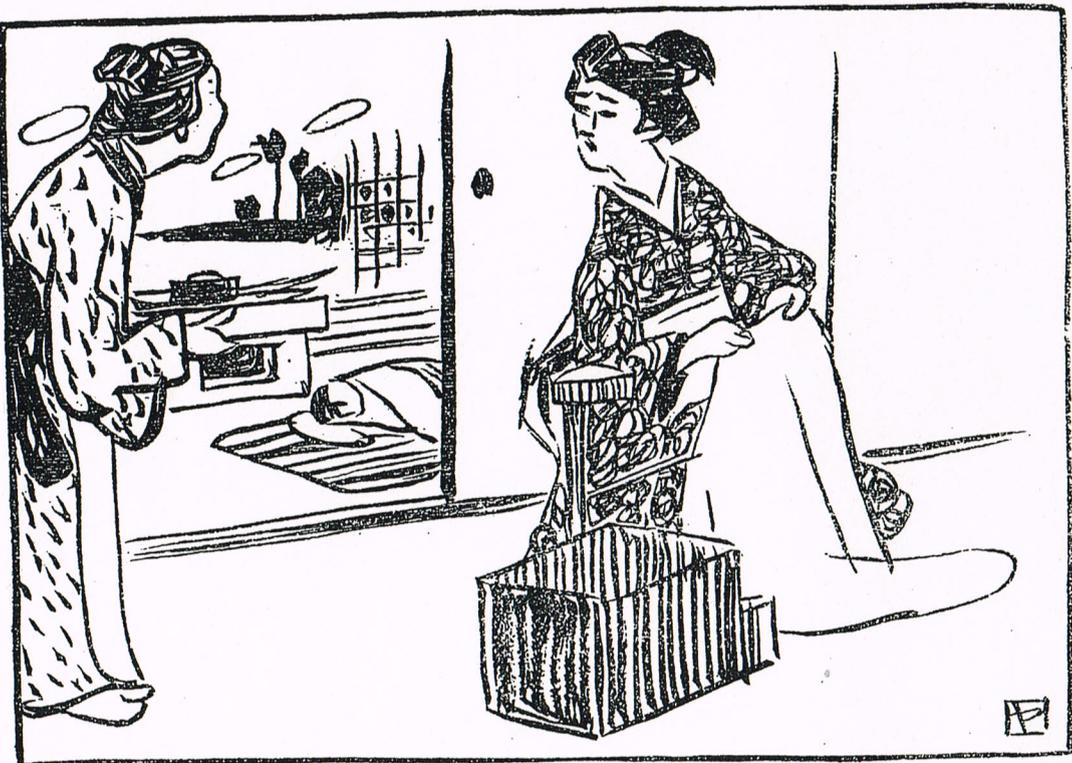
「では頂きます。」と最う直ぐ
箸を執る。

「サア／＼何卒、オヤ最う出
來上りましたのね、貴女は本
當に精根てゐるらつしやるか
ら、何でもお早う御座いま
す、まあ可愛らしい、紅絹の
襟をお掛けなすつて、赤ちや
んの襟は何でも柔かいものが
一等で御座いますからね、そ
れに如何てせう、黄色い處へ
紅いので、本當にうつりの好
い事！」

云ひながら打返へし打返へ
し見入つて、

「短か／＼ないでせうかつて
貴女、これ位な身丈なら充分
で御座いますよ。一尺二寸も
御座いますでせう。」

「え、三寸。」
「それだもの貴女、如何して



大根を貰つたもんですからね、貴女のお好きな風呂吹
きを造へて見ましたが、あいしうあがれますか如何
か。」と永らく東京に出て居たお内儀さんは、奇麗な言
葉づかひで、今の今迄亭主といがみ合つて居た人と
は、まるで別人のやう。

「まあ然う、どうも難有う、今直ぐ頂きますけ共、一
寸と此處を一針だけ……」

「え、え御ゆつくり、オヤお襦袢で御座いますか、ま
あ本當に可愛らしい、オヤオヤひる迄お附けなすつ
て、御丁寧によくねえ。」

「だつてもほころびると困ると思つて。」

「然うて御座いますよ、子供のものは別してよくほこ
るびるもので御座いましてね、ですが貴女、中々如
何して然うは手が届きませんですからねえ、直ぐ後か
ら困るとは知れて居て、それで私なんかついぞ附けた
事御座いませんですよ。」

「どうせ遊んでるもんですから……ねえ小母さん、身
丈これ位で好いわねえ、一寸と見て頂戴、短か／＼無い
てせうか。」

奥さんはすつくり出來上つたのを、ふうわりお内儀
さんの前に差出した、而してお膳の前に坐つて、

此處いらじや、一尺か、丁度
じやいけないと云つて氣にす
る者が、精々一寸も上を切る
位なもので、短いどころです
か、三寸もありや充分で御座
いますよ。」

「然うてすかねえ、赤ん坊つ
て随分小ちやなものね。」

「え、え貴女、産れたてはほ
んの斯うして、手の掌に乗け
られる位で御座いますもの、
ホホホホ小ちやいにも、何に
も、そりや本當に小ちやなも
ので。」

打柄何處かて消魂しく女の
騒ぐ聲！

「何でせう？」奥さんは早く
も聞きつけて、じつと聞耳を
立てる。

「何ですか。」
お内儀さんも一寸と耳を澄

して居たが、
 「ナア船でも歸つて來たんでせう、鯛でも澤山有つたのかしら。ナニ何でも御座いませんよ。」
 「だつて小母さん、女の聲ですわ、アラ火事だつて！」
 奥さんは最う顔色を變へて居る。
 「え！」とち内儀さんも流石に浮き腰になつて、
 「一寸とお前さん」と表を向き、
 「戸外へ出て見たい、火事だつて呼ばつてるじやないか。」
 と裏でも、
 「汝早く行きて見ろ。」
 「おう。」

息子の岩さんは威勢よく駆け出したが、間もなくあたふた露地を這入りながら、
 「父、住吉さんが火事だど！」
 「何住吉さんが！何だちて又……」
 「何だちてだか、俺行きて見たら幕さ燃えて甚えや。」
 「そりやまあ！」
 お内儀さんは周章でた態に、つと起つて表へ出て行つた。
 「岩！岩！岩や。」

「アラお老婆さん！」
 いそ／＼大急ぎで出迎えて、
 「住吉さんが火事ですつて……」
 「だから、私や氣を揉んで、お前さんが又周章で戸外へ出て、火事でも見ると大變だと思つて、此處いらしや御前さん、お腹にある時火事を見ると、子供に赤痣が出来るつて云ふんだよ、だから甚麼に急いだか。」とせつなそうな息ざし。
 「アラ然うどうも難有う、よくねえ、サ、まあお上んなさいまし。」
 「皆な出掛けたの子。」
 「え、然うでせう、居なくなつて……」
 「阿母さんもですかい。」と火鉢の前に坐つて
 「何しろ驚ろいたでせう。」
 「えい、姉さんは？」
 「若し火の手が甚くなるといけないから、お前さんを家迄連れて來るつてね、然う云つてただけど、奴が如何にもおつかながつて、しがみ附いて、離さないものだから、代りに私を見さよこした譯ですのさ、だが好い鹽梅に大した事も無いらしい。」
 「然うですかどうか……」祐ちゃんも可愛相に驚いたで

立て續けに呼つたが、ねつから返事が無いので、
 「此野郎奴居やがらねえ、じや奥さん、俺ちつよくら駈け付けて來ますべい。」
 「然う、御苦勞様ねえ。」
 住吉さんと云へば直ぐ傍、南隣の藤四郎屋、三郎屋と、此二軒を置いて居るばかり、周圍に申譯丈の松原はあるが、如何なる事かと、奥さんは起つて見たり居て見たり。
 「小母さん！」
 堪らずなつて呼んで見たが答へが無い、表へ出掛け、庭の隅つこの薄暗がりまで覗いて見た、けれ共誰も居ない。
 ヨッシヨ、ヨッシヨ、ドタドタドタ。戸外は船方共の駈け附ける音で、騒々しい事おびたゞしい
 「周章でたつて仕事が無い、」
 強て氣を落着けて部屋に歸つたが、何をしても無く、机の前にしよんぼより。と、
 「居ませんかい阿母さん、オヤ誰も無ない。奥さん、奥さんは？」
 兼て奥さんは梅澤の姉さん／＼と親しんで居る、其處のお老婆さんの聲なので。

せう。
 「あ、彼奴も子供の時、焼出しを喰つた覚えがありますからねえ。」
 當時のさまを思ひ出したやうに、お老婆さんは浸々云つて、そつと吐息をする。
 以前學校時代、姉さんに誘はれて、一緒に此地へ來た事があつたが、其時は斯うした漁場ながら、大した呉服屋で、全盛に暮して居たものを、今は僅かに荒物をあきなつて、むさみやの袴、天に、世帯くづした姉さんの痛々しさ。などと奥さんは心の中に思つて居る。
 「何だ、あれんばかりの事に、いけ人騒がせな。」
 「然うよ、ホンのポヤてねえか。」
 斯うした荒つぱい事を云ひながら、一しきり船方共が引上げると、其後から直ぐ醬油屋夫婦も歸つて來た。
 「如何でした？」と第一にお老婆さんが聲を掛ける。
 「オヤまああなた、よく來て居て被下いました、私達や周章で、出て行つて了つて……」
 「然うさ女だてらに、火事だとさへ云や、家のがは何時でも斯うでけすからね、奥さん淋しかつたでせう。」

「え、でも最う鎮まりまして？」
「お堂が半分ばかり焼けて、それでもまあやつと消しました。」

「まあ、早く鎮まつて結構、だが何うして又火事になつたらう。」

「お燈明に上げた蠟燭が幕さ燃えついたらもんだて。」

「何だちて又、それが知れなかつたらうね。」

「それがさあ老婆さん、太郎どんが市場の芝居を手傳ひに行きて、居ねえもんだて。」

「おえねえ事したてねえか、それぢや世話人共が承知しますめえ。」

「だから彼畜生奴、斯うして開けつ放して出歩きやつて、何處さこじけやがつたか、おつ出して了解へつて、皆なて云つてましてんか、ねえお前さん。」斯うお内儀さんが云ふと、

「何、然うばつかりでもねえ、西原屋の爺様なんか、然う云ふばかりも行かねえ、此堂に居たつても、彼奴も喰へねえからちて、然う云つてたてねえか。」と醬油屋さん。

「ほんにお賽銭ちたつて僅かだからね、太郎どんも無理は無え。」

「太郎どんて番人ですか。」
先刻から黙つて居た奥さんが訊いて見る。

「え、まあ番人と云や番人で御座います共ねえお老婆さん、別段頼んだ譯でも無く、一人て彼様して彼處へ、這入つただすねえ。」

「あ、病氣でね、まあ女にしろと血の道と云つたやうな風で、蒼い顔をして元々他國者であつたが、此土地へ流れて来て、貰つて歩いたりなんかしした事もあるし、お堂へこもつてお蔭でまあ、此頃じや彼の位な躰になつたんですよ。」

「今ぢや用使ひに歩いたりなんぞして、俺達よりや、結局樂かもしれねえハッハッハッ」

「まさかお前さん、彼の年とつて、女房一人養ふ事も出来ねえで、彼様してやうと云ふんだもの、可愛相な者にや違ひないさね。」

「而して幾つ位ですの。」

然うです、ね、三十七八、四十にもなりましてせう。其晩は然うした事でお開きになつたが、翌日のお晝過ぎ、奥さんは昨夕のお禮旁々梅澤へ遊びに行つた。

店の間の火鉢にあたつて、姉さんと話し込んで居ると、急に戸外が騒がしくなつて、覗いて見る間も無く

「えどれッ。」
「ソレ彼の皮色のぼつたを着た、脊の高い……ね、見えてせう。」

見ると如何にも顔色の蒼い四十男が一座の中に交つて居る。

「まだ誰も火事の事知らさないかしら。」

「歸つて見ておつたまげる事だつへ。」

「でも太郎どん儲つたと見えて、御覽なさい洒落てる事！」姉さんは面白相に笑つたが、

奥さんはじつと、其新らしい足袋、新らしい下駄と、こればかりが眼に立つ、それに見入るのであつた。

「ゾロ／＼と女子供にとりまかれた一群、眉を落して、頭髮は引詰めの樂屋鬘、此間うちから市場でうつて居た、女芝居の一座とは一目でうなづかれる。黄八丈の書生羽織や、獅子毛の肩掛に可成り風俗を作つて居るのもあれば、赤ん坊を脊負つて、子供の手を引いてぼろ／＼のなりのもある。丁度買物に來合せた娘つ兒は、黄八丈の羽織の指差して、

「あれ見たい、彼が政岡になつたですよ。」

「然うかい座頭と見える。」と姉さんは、のび上るやうにして其後姿を見入つたが、

「オヤ太郎どんが！」